

# SPECIAL STORY × 崎長ライト

ドクターズマガジン初登場の作家で内科医の崎長ライト氏による書き下ろし小説

## “ 研修医・成瀬ヒカリが海を見た日 ”

～ 長崎・大型クルーズ船新型コロナウイルス集団感染 ～

二〇二〇年四月二十日月曜日  
この日を境に長崎の街の風景は一変した。

僕は、この日早朝から長崎大学病院の研修医を連れて、細長い長崎半島の中間地点にある長崎記念病院の二階の療養型病棟で働いていた。回診をしながら、中心静脈カテーテルの輸液ルートの交換や胃ろうチューブの交換を、研修医に教えていた。

「寝たきりの患者さんばってん、ちゃんと自己紹介ばしてね」

この春、東京から長崎にやってきた彼女は、ベッドに横たわる患者さんへ挨拶をした。

「研修医の成瀬ヒカリです。よろしくお願いします」

内科医の僕の本業は、大学病院の研修医を指導すること。大学病院では経験できない地域医療の現場を経験させるために、教育拠点を長崎市郊外の病院に置いている。

「じゃあ、次は気管支カニューレ交換ね。まずは……」

「施行前の診察ですね」

「いや、その前に、手指消毒ば、せんばよ」

長い髪を後ろで束ね、真新しい半袖の白衣をおしゃれに着こなしているヒカリは、アルコール消毒液を手垂らす。僕は、それを見守

りながら思いを巡らせていた。

今のところ、長崎の新型コロナウイルス感染者は、十七名。長崎市内ではほとんど感染者が確認されていない。街にはある程度の緊張感はあるものの、都会の状況とはまるで違う。落ち着いている。

「よし、上手！うまく入つとるばい。最後は……」

「エア入りの確認ですね」

ヒカリの手際のよい処置のおかげで、昼頃には仕事を終えた僕は、売店に寄つた後、タクシーに乗り込んだ。大学病院へ帰るのだ。窓を少し開けて走り出す。

「やつぱり、長崎のカステラは美味しいですね」

カステラを頬張るヒカリの向こう側には、造船所が並び、大小のクレーンが頭を垂れていた。その向こうには、春の陽が照らす穏やかな長崎湾。ヒカリはスマートフォンでそれらをおさめる。

「うわー、ヤバイ！キレイな海。大きな船も泊まっている」

湾の奥まったところにある三菱重工の香焼工場。白い巨大な船が見えた。クルーズ船？今、日本に入つてこられるのか……

「長崎って、造船の街なんですね」

ヒカリは、長崎に縁もゆかりもないが、こつちでの研修を選んだ。

毎週難題が湧き上がる。最後の方に、恒例となった感染制御教育セッション！教授の泉川公一が県内のコロナ患者の情報提供をする。

「今のところ、なんとか落ち着いています」

「それは、よかつた」

中尾病院長がそう言つて、会を閉じようとした。

「ご苦労さまでした。来週の日程は……」

「えー、すみません、ちょっと、待つてください」

泉川が、再度声をあげた。半袖のスクラブから右手を挙げている。スマホを握っていた。

「今、変なメールが入りました」

皆が、泉川に注目した。泉川はメールを読み上げた。

「えー、三菱香焼に停泊しているクルーズ船で……、えー」

クルーズ船という言葉に反応した一同は、静まり返った。僕の脳裏に、さつき見た白い船の残像がよみがえった。泉川が続ける。その声は震えていた。

「船内で……、コロナ陽性患者が発生しました……」

泉川の隣に座った深紅のスクラブを着た看護部長の小淵美樹子が、悲鳴に近い短い声をあげた後、両手で口をふさいだ。僕の隣に

「何で？彼氏がこつちにおると？」  
「違いますよ。そんなこと聞いたらセクハラですよ」

ヒカリは、唇の端に砂糖を付けてニコリとして、大きな瞳の中に僕を映す。

「おいおい、東京から来た女子ー、頼むから田舎のおじさんを脅かすなよー」

「感染症やりたくないなあー、と思つて。将来、海外で働きたいんです。アフリカとか」

「でたなあー、ばい菌好きの変わりもん女子ー！」

毎年、一定の確率で、こういう人が長崎にやってくる。僕は、愛情(?)を持ってそう呼んでいる。なぜだか、女子が多いような気がする。ヒカリは医学生時代、アフリカに行った経験もあるようだ。僕は保守的な男子で、おまけに小説を書くようなインドア派で野外は苦手。「蚊とか虫とか、大丈夫？」  
「ゼンゼン、大丈夫。目に見えるものは、怖くないですよ」

確かに。蚊とか虫なら、自分で対策のしようがあるような気がするが、ウイルスはどうしようもない。「ですよ。自分ではどうしようもないですから……」

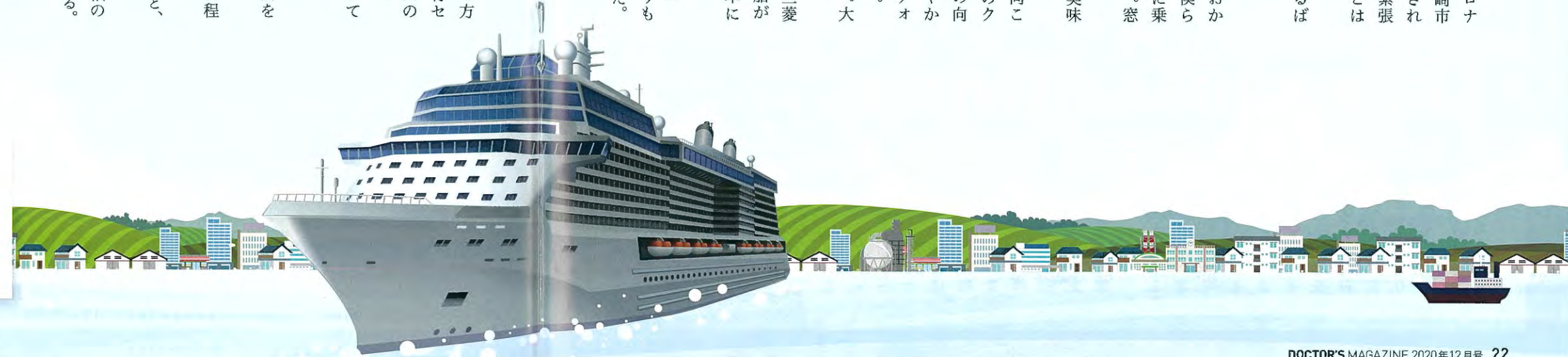
と、ヒカリはここ数か月のどうしようもない話をぼつりぼつりと話

した。卒業旅行のキャンセルと、そのキャンセル代は戻らなかつたこと。卒業式・謝恩会は中止で、お別れができなかつたこと。入職のオリエンテーション・歓迎会も中止で、同期との仲も深まらず、マスク着用のため、指導医の顔もわからず、方言もわからないこと。  
「でも、研修できるだけいいですよ」  
ヒカリの東京の友達は、コロナで自宅待機になつたらしい。  
「まあー、しょんなかさあー。がんばらんばー」  
どうしようもないアドバイスしか言えない自分を情けなく思いながら、大学病院の玄関前でヒカリと別れて、会議室へ向かつた。

僕は、病院長補佐として、午後三時にはじまる大学病院運営会議に出席していた。  
約三千人が働く巨大組織、大学病院の最高意思決定会議で、毎週月曜日に行われる。楯円状になつた大きなテーブルに副院長や各部署の責任者が並ぶ。船のマークの病院の旗を背に中尾一彦病院長が司会をし、山積する病院の問題を喧々諤々議論し最終決定するのだが、最近の議題はコロナ一色になつていた。コロナ病棟をどうするか、人員の再配置、マスクの不足、見舞いの制限、PCR検査の問題……、

### PROFILE 崎長ライト 作家・内科医

本名 浜田久之。長崎大学副学長(高大接続担当)。長崎大学病院医療教育開発センター教授(内科医)。2015年より作家活動を始め、『小さな世界平和』『フルマッチ』『ハッピー♡マッチ』『坂の途中』等、医療小説を執筆している。





座っていた、中尾病院長が、絶句して足を投げ出し椅子にのけぞった。副院長らが天を仰ぎ、事務方が前のめりになった。

マジか……。嘘だろう……。横浜の二の舞……。長崎で……。無理……。医療崩壊……。

しばらく沈黙が続いた。開け放たれた窓から入る海風がブラインドを揺らし、浦上天主堂の教会の鐘の残響が部屋に渦巻いていた。僕にはさまざまな感情が入り混じっていた。作家としての義務感と現場の医師としての恐怖感……。いずれにしても、この体験をまとめて本にするのが自分の使命だ、と強く思った。この日から予想を超える怒涛の日々が始まった。

クルーズ船コスタ・アトランチカ号の新型コロナウイルス集団感染は、二〇二〇年四月に長崎港で発覚した。横浜港の感染者七百十二名、死者十三人を発生させたダイヤモンド・プリンセス号の集団感染の発生から、約二か月後のことだった。横浜と比べて、長崎のクルーズ船は全国的な報道がほとんどされなかった。その理由のひとつは、死者がでなかったからだ。ウイルスの封じ込めに成功したために、センサーシヨナルなニュースにならなかった。

六百二十三名が乗船し、そのうちの百四十九名が新型コロナウイルス陽性者にした。しかし、結果的に死者ゼロ

奇跡か？否、奇跡でもなんでもなく、河野茂学長と泉川公一教授の師弟が、衝突しながらも緻密な計画を練り、医療、行政、自衛隊、DMAT、DPAT、バス会社等の人々が参加したチーム長崎の努力の結果であろう。

混乱の最中、県医師会長の森崎正幸は「医療危機的状況宣言」を、院長中尾一彦は、「緊急災害宣言」を発令した。この集団感染により、船員達は生命の危機にさらされ、市民は恐怖に怯え、医療体制は麻痺寸前となり、医療物資は底をつき、さまざまな風評被害が起こった。現場では、こう呼んだ。「コスタ災害」。

約四十日のコスタ災害との闘いが終わった初夏、ヒカリは、僕と一緒に再び長崎記念病院で研修をしていた。採血、血ガス、胃ろうチューブ交換、気管支カニューレ交換等をスムーズに行ってくれた。腕を上げたねと僕が言うと、少しハニカミながら言った。

「コスタ災害の時、ちょうどICUの研修中だったんですけど、だい

ぶ鍛えられました」

命がけて昼夜問わず闘う指導医の先生や看護師に、心底感動したという。

「医者って、凄いですよね」

タクシーは、初夏の日差しを受けてゆく。後部座席の横で窓の小さな隙間から入る気持ちの良い風に、長い髪が揺れていた。再びつぶやく声が僕の耳に入った。

「私も、なれますかね。あんなふう」

車窓を見つめるヒカリの表情は読み取れない。

どう答えるべきか、それとも聞こえないふりをするべきか……。僕は迷っていた。答えは、僕ではなく、彼女自身の中にある。そんなことは、彼女もわかっているはずだ。「運転手さん、ちょっとここで、休憩」

女神大橋の下に車を止めて、ヒカリと一緒に外へ出てみる。海からの柔らかな風。

「うわー。いい眺め！気持ちいい〜」

伸びをするヒカリ。山と空。緑と青。そして、眼前に広がる海。彼女が見つめる鏡面のような蒼い海は、小さな長崎港から遠く東シナ海へ続いていた。

※成瀬ヒカリ以外は実名の人物、実在する施設です。



## 『死者ゼロの真相』

～長崎クルーズ船新型コロナ災害との激闘～

監修：河野 茂 編集：崎長ライト 発行：長崎新聞社

医学生限定で、先着 **30** 名に『死者ゼロの真相』を **プレゼント** します。

下記へ **大学名、住所、氏名** を明記の上、メールをお送りください。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

「新・鳴滝塾事務局 ドクターズマガジン書籍プレゼント」宛

E-mail : [info@narutaki-jyuku.jp](mailto:info@narutaki-jyuku.jp)

〒852-8501 長崎県長崎市坂本1-7-1 Tel.095-865-8351 Fax.095-819-7882

### Book Data

仕様：四六判、326ページ

価格：本体1500円＋税

刊行日：2020年10月1日

